

天理教の乱について

栗 田 智

- はじめに
- 一 教団の源流
 - 二 教団の形成と組織
 - 三 教団の構成者
 - 四 教義内容―特に現世利益について
 - 五 反乱の経過
おわりに

はじめに

天理教の乱は、嘉慶十八年九月に、林清・李文成らによって北京と直隸・山東・河南の三省交界地域を中心におきた三ヶ月に及ぶ反乱である。特に北京では、教徒達約二百名が紫禁城に突入するという事態を引き起こすに至った。

天理教の乱について(栗田)

こういった反乱の特異性の割にはこれまで反乱全体を扱った論文は少なく、またいくつかの疑問点も指摘されていない⁽¹⁾。そこでこの小稿では、従来の天理教の源流は八卦教であるという見解に対する疑問から出発し、教団の形成とその組織・構成者・教義内容及び反乱の経過等、種々の角度から考察することによって、反乱の全体像を描き出すことにつとめた。

一 教団の源流

天理教という名称は、この反乱によってはじめて官側の史料にあらわれてくるので、その源流をたどるのには、乱に参加した教徒達の供述による以外に方法はない。教団の中心人物林清の説明をうけた牛亮臣の供述によると、⁽²⁾

他的教は京南人顧文升伝授。従前山東曹県人劉林是先
天祖師、林清は劉林転世為後天祖師。這教本名三陽
教、分青紅白三色名目、又名龍華會、因分八卦、又名
八卦會、又改名天理會。

ということだが、その他の教徒達の供述をまとめると、
『教名は白陽教、または榮華會といい、教主は顧姓の人―
顧亮という名が多い―で、その下に郭潮俊、宋景耀、陳茂
林、劉呈祥、屈四などの頭目があり、会内は八卦に分かれ
ていた。そして林清は坎卦を掌する宋景耀の下へ入教し
た。』というようになる。白陽教と榮華會という名
称が併用されているのは、白陽教の經典に「龍華經」があ
るためであり、白陽教の別称と考えられる。また三陽教と
いう名称が使用されているのは、前述の牛亮臣の供述だけ
であるが、これは佐々木正哉氏が指摘しているように、何ら
かの機会に劉之協―嘉慶白蓮教の乱の中心人物で劉松の混
元教を三陽教と改めた―派との交流ができ、その教義も類
似しているために名称を混用するようになったか、あるいは
後に紅陽教徒を教団内に吸収したため、紅・白の名称が
そろったことなどが考えられよう。いずれにしても林清の
教団は、従来の論文では八卦教中の坎卦教の系統に属する
とされているが、白陽教に入教していたと供述している教
徒が全体の約半数を占めることなどから、明代万曆年間に

王中、離卦教主邵生文、坎卦教主孔万林などの人々であつ
たと思われる⁽⁶⁾。ただし、このことは教徒達にはすぐには
伝わらなかつたためか、各卦の名称が「実録」中にあらわ
れてくるのは、乾隆五十年代になってからである。とこ
ろがその劉省過も乾隆三十七年の摘発で、子の劉銓ととも
に処刑されてしまい、各卦を統轄する人物が存在しなくな
ったことから、各卦教主を中心とする集団は全く独立した
一個の教団として活動するようになり、それと並行して官
側の史料中でも五輩道収元教から八卦教という名称に変わ
っていった。ただし全く五輩道収元教という名称が用いら
れなくなる訳でなく、その後も「五女伝導書（五輩道収元
教の經典の一つ）」を有する収元教という教団が度々摘発
されて⁽⁷⁾おり、また劉氏に対する信仰心も根強く残ってい
る⁽⁸⁾。

以上のことから林清が劉林という名をあげたのは、彼が
白陽教に入教する以前に震卦教主王中の孫の王棟と面識があ
つて、八卦教に関する程度⁽⁹⁾の知識があつたと考えら
れること、白陽教内も八卦に分かれていて、彼もその中の
坎卦に属しており、さらにその坎卦を八卦教中の坎卦に置
き変えたこと、後に実際に八卦教徒を教団内に入させた
ことにより、彼らに対して自らの位置づけをおこなう必要
があつたことなどが考えられる。

天理教の乱について（栗田）

直隸灤州石仏峪（口）の王森の大乗教から分かれた張某の創
始した円頓教（白陽教）の流れをくむものと考えられる。そ
れならば何故王姓や張姓の名を用いずに、八卦教の教主で
ある劉姓を挙げているのであろうか。

ここで、八卦教についても少しふれておかねばならない。⁽⁵⁾
八卦教はもと五輩道収元教といい、康熙年間の中ごろに山
東單県の劉佐臣が創始したものと思われる。教主の座は子
の劉如（儒）漢―損職の山西榮河県知県―、孫の劉恪―捐
職の州同一―と受け継がれ、山西・山東・河南方面に広く教
徒を有していた。雍正年間になって、教徒の一人である山
西省定襄県の韓徳榮が、教内を八卦に分けるなどの組織改
革を独自に行い、伝教活動をはじめた。しかしそのため、
乾隆十三年になって官側の摘発を被り、当時教主であつた
劉恪も検挙されて、五輩道収元教は大打撃を受けた。以後
教主の家系である劉氏の力は弱まってゆき、各地に存在し
ていた頭目達が台頭しはじめた。その結果、乾隆五十六年
十月丙子の上諭に、

劉省過邪教案係八卦分授各犯

とあるように、劉恪の子劉省過は經典の一部に「八卦図」
があることから、韓徳榮の八卦の組織を利用して、有力な
頭目達を「卦教主」に封じ、劉省過は八卦の頂点に立つ存
在となつたのであろう。この頃に封ぜられたのが震卦教主

一方、天理教のもう一人の中心人物である李文成の所属
した教団についてはどうであつたのか。李文成に関する史
料は極めて少なく教徒達からは「震卦教主」と呼ばれてい
るものの、いつ震卦教に入教したのか、さらには実際に入
教していたかどうかははっきりとしない。ただ彼が後に自
分の部下となる劉国明を拜して「九宮教」に入教していた
ことは事実のようである⁽¹⁰⁾。その他彼に関する主な記述を挙
げてみよう。

○那年（嘉慶十六年）李文成在滑県掌了震卦教―林清の
供述―

○（林清）……十六年六月間到過滑県道口集才指称李文
成是震卦王教主転世―張建木が劉国明から聞いた話⁽¹¹⁾
以上のことから、九宮教に入教して、河南省滑県方面で
勢力を持っていた李文成に、林清が以前より面識のあつた
王棟の震卦教主の称号をあたえたため、震卦教と称するよ
うになつたものと思われる。九宮教に関する具体的な内
容はよくわからないが、八卦教とはそれほど相違はなかつ
たであろう。

このように教団の中心人物である林清・李文成の所属し
ている集団の名称が異なることから、天理教は白陽教・九
宮教を中心として八卦教・紅陽教をくみこんだ集合体であ
るといふことができる。

二 教団の形成と組織

ではこの教団はどのように形成され、組織されていたかについてみてみよう。

嘉慶七年に震卦教主王棟と知りあって、八卦教の知識を得ていたと思われる林清は、十一年に榮華会（白陽教）に入教した⁽¹³⁾。そして二年後の摘発事件の時に偶然牛亮臣と知りあい、それが李文成との結盟に進展していった。この結盟が天理教を直隸・山東・河南の三省に及ぶ大きな教団へと発展させた。すなわち林清は李文成が所属していた九宮教に接近し、入教者に土地や官職を与えろという現世利益を打ち出して入教者を増加させ、こういった状況を背景に、教主梁健忠の教は「真」でないと批判した。これに対して梁健忠は勢力的に弱かったため、教主の座をおり、李文成がそれにかわった⁽¹⁴⁾。そして林清はこの李文成に震卦教主の称号を贈った。（従ってこの時点では実際には他の卦の支配は行なわれてはいなかったであろう。）このようにして八卦教の系統とは異なるが、震卦教主と称したことにより、三省に存在していた八卦教徒の加入に成功していった。特に山東省ではいち早く李文成と関係を持った徐安国が中心となって八卦教の頭目達を加入させている⁽¹⁵⁾。林清・李文成が八卦教徒の吸収を考えたのは、この地方で最も

勢力を有していたことや、前述のように彼らがすでに八卦教と係わりがあったためと思われる。

一方北京方面では、乾隆中期より紅陽教に入教して勢力を持っていた頭目の李老を加入させ、彼の支配下の教徒達もそのまま林清の榮華会に入るようになった⁽¹⁶⁾。

また時間的には結盟より一年前（嘉慶十五年）になるが、牛亮臣が彼の相婿で武術の達人である馮克善を引き連れていた⁽¹⁷⁾。彼は本来八卦教とは係わりのなかった人間であったが牛亮臣に自分は離卦教であるといったことから、この離卦教の馮克善の下に武術関係から徒弟が集まり、彼らも離卦教と称するようになって、山東省德州方面に勢力を広げた⁽¹⁸⁾。なお武術集団に関しては鈴木中正氏がすでに述べているが、天理教では他において武術を学んでいた者が入教して武術集団を形成しているケースが多い⁽¹⁹⁾。これは白陽教や八卦教等に武術的要素が少ないので、馮克善の加入によって、教団を武力的に強化することを目的として行なわれたものと思われる。

その他直隸省鉅鹿県の大乗教徒や山東省商邱県の離卦教主郵生文の孫とも接触をはかったが、あまり成功はしなかったようである⁽²⁰⁾。

このようにして形成された集合体の教団を単一教団として組織化するために、全体を八卦に割り当てることがや各種

称号を定めることが行なわれ、さらには軍事的色彩をもつ元師・先鋒・総兵というものも定められた⁽²¹⁾。（ただし、元師などの称号は反乱の直前や反乱中に定められている）しかしこれらは各教徒の供述によって、多少教主の名や称号などが異なっている。これは天理教自体の組織がしっかりしたものでなく、割り当てが徹底しなかったために教徒達が混同したか、あるいは教徒達が称号を勝手に自称したりしたためであろう。たとえば李文成は独自に王号や各卦教主を定めている。従って李文成直隸の各卦教主は別としても、それ以外の各卦教主達が完全に林清・李文成の指揮下にはいつていたかどうかは疑問が残る。

三 教団の構成者

これらの教団を組織したのはどのような人々であったろうか。これについては小野田サヨ子氏がすでに論じている⁽²²⁾ので、それを中心に自分なりに若干の問題を述べてみたい。なお述べるにあたり、小野田氏が試みている林清・李文成・馮克善を中心とする三つの地域に分ける方法を取り入れることにした。

(一) 北京を中心とする林清の集団は太監・手工業者・雇工・胥吏・王府の包衣など多種に及んでいるが、全体の比率

天理教の乱について（栗田）

からみると雇工関係の者が三分の一近くを占めている。ただ彼らはすでに教団に所属しているそれぞれの雇主の勧めによって入教した者がほとんどである。すなわち雇工にとっては雇主は教内の師でもあったわけである。従って彼らの入教の動機を考えた時、必ずしも自分の意志とは関係ない部分も存在した。（たとえば雇主に脅されるなど⁽²³⁾）もちろんそういった下層部に属する人々にとっては現状の打破はみな願望するところであるが、雇主と雇工という階級対立が教団の中にまで持ち込まれたため、彼らの要求を反映した現世利益というものは示されずに単に「好処⁽²⁴⁾」いこととがある⁽²⁵⁾。というようなものとどまってしまった。なお雇工の職種について小野田氏は「独立の生業を持たず他家で働いている者」と規定して具体的なことについては言及していないが、雇工の中にも「短工」と称する者も存在しており、これは通常農家の臨時の作男を意味するものである⁽²⁶⁾ので、いわゆる貧農層もこの中に含まれていると思われる。

太監や王府の包衣も貧しい人々であった。彼らは林清より毎月金銭が贈られてくるという絶対的な現世利益により、その狂信的傾向を生み出し、さらに「事成れば総監に封ず⁽²⁶⁾」という地位的にも彼らにとっては最高位を条件として提示されたことが、さらにそれを強固にした。それに対

して純粹に宗教信仰が入教の要因となつてゐる場合もある。前述の紅陽教徒の李老がそうである。彼は四十六年間にわたり習教を統括している人間であるが、林清の勧めで嘉慶十八年六月に入教した。これは紅陽・白陽の両教団に内容の差がなかったこともあるが、入教の主たる要因は彼の信仰心によるものであろう。

(二)河南の李文成を中心とする集団では、教団内の「逆産地では滑県が三百九十八頃三十七畝、濬県が百四頃八十八畝」、事成れば「土地一頃、糧食数石」が獲得できるといふようなことから、小野田氏の指摘しているように大半が農民とみなすことができる。ただ彼らは本当にこういふ言葉を信じて数方にも及ぶ人々が動いたのであるか。もちろん貧農にとつて土地を得られるといふことは大きな魅力にはちがいないが、機会さえあれば彼らを立ちあがらせる要素が常にあつたと考えられる。

(三)山東徳州の馮克善を中心とする集団では職業の判明している人の数が少なく、全体としてはつきりとしていない。しかし武術が入教の主たる要因だけに、いわゆる「無頼の徒」の存在がかなりあると思われる。

その他三地域の共通点として、胥吏出身の人が存在していることがあげられる。しかも彼らは教団内で重要な地位を占めている。それは胥吏が土着勢力となつて地域の人々

に定着しており、しかもその関係が人々の上に立つものであるから、たとえ胥吏をやめた後でもその影響は残つていふであらうし、さらに胥吏解任の後、彼らは各地を流転しているのど村落共同体を超えた視野が持てるようになっていたことなどが考えられる。また彼らはいずれも罪によつて解任されてゐるので、官吏に対する不満は持つていたであらう。しかしそれは官僚体制への不満とはならず自ら官吏にならうとする要求におきかえられた。このことが前述のような多くの偽職がつくられた一つの原因となつてゐる。

四 教義内容―特に現世利益について

天理教団は前述のようになつていくつかの教団の集合体であるために、教義内容をみた場合にその中になつていくつかの形がみられ、それらを土台としてさらに新しく林清・李文成が打ち出したものが加えられているので、この二つの要素を分けてみる必要がある。

(1)従来の教団の内容

○入教時に真空家郷無生父母の真言を授けられる。この真言を打坐（座禪）して黙誦すれば吉へ向い、凶がさけられ、窮が救える―榮華会（白陽教）―

○入教者は刀兵水火の災難を免れ得る―榮華会（白陽教）―

○真空家郷無生父母の真言を八十一回、両手で肩を抱き、眼を閉じ、跌坐して唱える。これを抱功といひ、功が成れば難を免れ得る。―八卦教―

○入教する際には師と仰ぐ人に錢一〇二百文を根基錢といふ名目で納める。さらに清明・中秋の二回、教徒が会合する時に自分の出資できる範囲で跟賑錢といふ名目で錢を納める―八卦教―

○平日喫斎坐靜する。入教時に一〇二百文納める。―九宮教―

このように多少の差異がみられるが、基本的には真言を唱えて金錢を出資し、そのかわりに免難といふ現世利益が得られるといふようになってゐる。

(2)新しく林清・李文成が打ち出したもの

①現世利益の変化

○人に金錢を施せば、将来十倍になつて返してくる。

○引路して事なれば総管に封す。―太監の場合―

○事なれば一〇二品の官職に封す。―都司の場合―

○入教者で錢文・糧食を送る者は起事後の官職・錢一

百文・土地一頃・糧食数石が与えられる。―九宮教徒の場合―

天理教の乱について（栗田）

○事なれば、好處・封官・兵糧数石が与えられる。―雇工の場合―

これらを見ると天理教自体が反乱を前提として構成された教団であり、入教者をより多く獲得するために布教の対象により現世利益の内容を少しづつ変化させ、それぞれの階層に要求に適合する形をとつてゐる。

②刼の思想が加わる

教団内では「三仏応刼統親通書」を經典とし、それにとつて

我們推算天書、弥勒仏有青洋紅洋白洋三教、此時白洋教應興

とし、さらに後述のように欽天監による奏上と関連づけて今歳九月後交白洋刼

として、刼の思想を利用した。白蓮教系教団においては、よく弥勒下生信仰と関連づけて用いられ、その場合刼の意味するものは、飢饉や災害あるいは官吏の弾圧などであったりする。天理教では刼の方のみが強調され、その内容も自らの反乱をたとえてあり、入教すれば反乱の際に生ずるであろう殺戮から身を守ることができるとした。恐らく當時は反乱がおればこのような状況になると考えられていたのであろう。またこれは逆にいうと入教しなければ殺されるということにもつながり、入教者の獲得に役立った。

③ スローガンの提示

彼らが提示したスローガンのものあげてみると

○等北水帰漢帝—林清の集団で使用された

○大明天順—李文成の集団で使用された

○奉天開道—全地域において使用された

となる。北水は北が坎卦の方角となることから坎卦主林清をあらわし、彼が漢人皇帝の地位につくことを意味したものとと思われる。これは林清が紫禁城攻撃によって清帝にかわって皇帝になることを宣言したことになるが、北京周辺の人々にとってもこれは予想されたことらしく、これに似た謡がこの地方にはやっていた。林清が漢帝の名を利用したのは、八卦教の原教主劉姓と同姓であることや、李文成の集団で大明という名称を使用していたことと同様に民族的要素もあったと考えられる。もちろんこれらは清末にみられるような明確な「滅滿興漢」といったようなものではないし、むしろ前述の星象の異変を根拠として自分の野心を正当化する意図の方が強いかもしれないが、彼らが抱く現状への不満の間接的表現ということもあつたであろう。そして三番目の奉天開道というスローガンがまさにその現状への不満を改善することをうたったものであるといえよう。

五 反乱の経過

反乱の最初のきっかけは牛亮臣と林清の出会いである。この時に李文成の話が出て、結盟へと話しが進んでゆく。この結盟がどのような意図でなされたかは明らかでないが、靖逆記には

李文成者異人也、君欲挙事非其人不可⁽⁴⁴⁾

とあるからすでに反乱のような形をとることをどちらかが計画していたのであろう。結盟は林清が李文成のもとへおもむくことでなされた。そして前年に入教していた馮克善も加えて十六年から十八年にかけて五回にわたる会合をもち、反乱のための謀議がなされ、前述のような影響や行動の手順が次第に決定されていった。（この間の経緯については佐々木正哉氏が詳細に述べている。⁽⁴⁵⁾）

このような彼らの反乱の意志をさらに強固にしたのは星象の異変であつた。十六年八月紫微垣という星座の北西方向に彗星が出現した。欽天監ではこのため十八年八月に閏月を置くことをやめ、三年後の十九年二月に置くことにした。⁽⁴⁶⁾そこで星家象緯に精通していた李文成は、「この異変は兵象を主る⁽⁴⁷⁾」とし、さらに当時流行していた「八月中秋、中秋八月黄花落地」という謡と附会して、清朝が閏八月が適当でないので改めたのだとした。⁽⁴⁸⁾これによって星象の異

変が自らの行為に対する正当性を示したということになり、反乱に対する自信を益々深めた。また反乱決行の日時についても九月十五日（即ちもとの閏八月十五日）⁽⁴⁹⁾が第二の中秋になることから十八年九月十五日と決定された。これと並行して反乱の具体的方法も決められた。各教徒の供述によって多少の差異があるが、基本的には直隸・山東・河南の三省交界一帯六十四ヶ所と北京で一斉に行動をおこし、その後河南の李文成らは北京に向うことになった。⁽⁵⁰⁾特に北京では紫禁城攻撃に的がしほられ、河南からの援軍も派遣されることになって、準備工作は進んでいった。

しかしこの林清・李文成の計画については若干の問題がある。まず李文成が北京に兵を送るとすれば八月中に行動に移らねばならないがその形跡がないこと、次に河南で行動をおこした李文成が北京に向うまでの間、林清は持ちこたえるだけの準備があつたか、さらには李文成が部下達より林清との結盟についての反対意見が出た時

大事驟起、非広為樹敵、何以持久。林清密爾京畿、与⁽⁵¹⁾

之兵為我牽制官軍使我無北顧之憂、策之上者也

といて部下を納得させたことなどからすると、李文成は林清をきりはなして自らを頂点とする河南中心の体制のみを考えていたのかもしれない。

なお人皇・武聖人と呼ばれた馮克善は、当初より李文成

に対して不満を持つが、彼に人数が集まらないことから、やむなく李文成の下にはいることになった。⁽⁵²⁾

こういった彼らの計画も教団の規模が大きくなるにつれて官側に発覚する可能性もでてきた。まず八月に山東で崔士俊らが捕えられたが、九月にはいると李文成が捕えられるに至つた。⁽⁵³⁾そこで河南方面ではやむなく李文成救出のため、反乱の期日を繰り上げて行動を開始し、それが各地に広がっていった。ただ李文成は捕えられた時に足を負傷したため、行動範囲はあまり広がらず、河南省滑县城を中心として捻奪活動が十月末まで続けられる。

一方北京の林清の方では予定通り攻撃が決行されたものの、予定した人数が集まらず、一日で攻撃は失敗に終わってしまった。彼らに無謀とも思える紫禁城攻撃を為さしめたものは何であつたのであろうか。林清は捕えられた時、反乱の動機について

我輩経上有之、我欲使同輩突入禁門殺害官兵以应劫数⁽⁵⁵⁾

と供述しているところから、林清の狂信的な野心によるところが大きく、それに従う人々も太監達のように自らの利益と「林清に邪術ありて、勝ちに至ることができる⁽⁵⁶⁾」というような林清に対する信仰心が合わさっている場合には大胆な行動に出たが、そうでない無頼の徒のような一発屋的傾向を持つ者や反乱の直前になって入教した者にとっては

宗教的絆は弱く、彼らの行動を左右したのは自己の利害のみであつたろう。

河南滑県では、その後李文成が新たに帥府を開いて偽職を設けて県城を中心に命令系統の確立を計ったが、すでにその他の拠点は官側によって破られつつあり、十月には滑県城も包囲されたため、作戦を変更して李文成は県城を脱出して太行山脈へ向い、その山麓でゲリラ戦を展開し、その間に新たに教徒を獲得して勢力を拡大した後、滑県城へ向うことになった。しかし官側ではこの動向を察知して軍隊を進めていたため、逆に攻撃を受けて李文成とその部下達は、ほとんど戦死あるいは焼死してしまつた。残された滑県城も十二月十日からの官側の総攻撃で陥落し、三ヶ月に及ぶ反乱も終りをつげた。⁽⁶⁰⁾

この方面で反乱に参加した人々の行動は県城を襲い官吏を殺害した後は農村部の搶奪に終始し、しかも局地的なものとなつてしまつた。これは蜂起の後、新たに政治目標が出されることもなく、教団の幹部達も教徒のみを組織の対象として、貧農層のいわゆる日和見の賛同者を組み入れることをしなかつたためである。この結果貧農層はその時に応じて反乱側にもついたし、また知県の組織する団練にも加わることもあつた。このあたりに反乱の限界があつたように思える。

おわりに

天理教の乱では、一般的な反乱の原因といわれる天災やそれに伴う飢饉及び官吏の弾圧などが下地には存在すると思われるものの前面に出されず、むしろ教主達の個人的な欲求が強調され、しかもそれが教団内に存在している思想と結びつけられ、さらに星象の異変を利用することによつて裏づけされていることに一つの特徴がある。すなわち反乱軍の大半を占める貧農層の危機感からでた反乱ではなく、教主達の自己の欲求を満たすためというところから出発しているといえよう。しかしそれが行動をおこすという点で、貧農層の要求する現状打破すなわち土地獲得や飢えを補うための搶奪等と結びつくことにより反乱になりえた。従つて李文成の河南方面では脅従の人も含めて数方に及ぶ人員を集め得たが、林清の北京では構成員の職業・階層が多種に及んでいるために利害関係が一致せず、しかも攻撃目標が紫禁城に絞られたため、構成員すべての賛同を得られず、予定数すら集められないという結果に終つてしまつた。従つてこの反乱は反乱の下地が整つていれば、他方面からの刺激で容易に行動に移りえる可能性を示したといえよう。ただしその下地の条件に関しては、この地方に

連続して飢饉があつたということを指摘して、後は今後の課題としたい。

- (1) 小野サヨ子 嘉慶十八年の教天理教の乱について 史帥
- 七
- (2) 平定教匪紀略 卷二十八
- (3) 故宮週刊中の林清教案
- (4) 佐々木正哉 嘉慶年間の白蓮教結社 国学院雑誌 77—
- 3
- (5) 清高宗実録 卷三百九、史料旬刊、第三十期
- (6) 那文毅公奏議 卷四十二
- (7) 清高宗実録 卷一千二百二十七
- (8) 同 卷一千二百六十一
- (9) 平定教匪紀略 卷二十一
- (10) 同 卷二十八
- (11) 同 卷三
- (12) 同 卷一
- (13) 同 卷十一
- (14) 同 卷二十八
- (15) 同 卷二十九
- (16) 故宮週刊 二百九期
- (17) 平定教匪紀略 卷二十四
- (18) 鈴木中正 中国史における革命と宗教
- (19) 平定教匪紀略 卷四十二
- (20) 同 卷三十五
- (26) 前掲の佐々木氏の論文に王号に関するものがある。また各卦教主については、平定教匪紀略の卷十五では震卦教主

天理教の乱について (栗田)

- 李文成、邱卦教主林清、艮卦教主郭泗湖・解中寛、坤卦教主邱玉、兌卦教主候国龍、離卦教主張景文、乾卦教主張廷舉、巽卦教主程伯学とあるが同巻四では震卦滑県頭目于克敬、磁州頭目趙得一、長垣頭目賈士元・羅文志、離卦教道口鎮頭目王修智、曹県頭目徐安国、德州頭目宋躍隆、金郷県頭目崔士俊、巽卦頭目楊遇山、乾卦頭目華姓、艮卦頭目王進濛、坤卦頭目魏正中、兌卦頭目王忠順とある。
- (22) 那文毅公奏議 卷三十二
- (23) 註(1)参照
- (24) 故宮週刊 二百二十六期
- (25) 同 二百二十五期
- (26) 故宮週刊 二百十八期
- (27) 那文毅公奏議 卷四十一
- (28) 平定教匪紀略 卷十六
- (29) 同 卷二十六
- (30) 同 卷一
- (31) 同
- (32) 靖逆記 卷五
- (33) 同
- (34) 平定教匪紀略 卷三
- (35) 同 卷十四
- (36) 同 卷二十五
- (37) 故宮週刊内の各林清教案内にみられる
- (38) 同 二〇二期
- (39) 靖逆記 卷五
- (40) 平定教匪紀略 卷二

- (41) 那文毅公奏議 卷三十
- (42) 平定教匪紀略 卷一
- (43) 故宮週刊 二百二十六期
- (44) 靖逆記 卷五
- (45) 註(4)参照
- (46) 靖逆記 卷一
- (47) 同 卷五
- (48) 嘯亭雜錄 卷六
- (49) 靖逆記 卷五
- (50) 平定教匪紀略 卷十九 なお六十四ヶ所の拠点については小野田氏も指摘しているように疑問点がある。
- (51) 靖逆記 卷五
- (52) 同 卷五「今林多大言少實際、李文成陰險叵測」とある。
- (53) 平定教匪紀略 卷一
- (54) 靖逆記 卷三
- (55) 嘯亭雜錄 卷六
- (56) 同
- (57) 靖逆記 卷五
- (58) 平定教匪紀略 卷十九
- (59) 同 卷二十二
- (60) 同 卷二十六

(立教大学大学院、文学研究科)

△受入図書 3▽

- 旧根戸村・川村一夫家資料目録(我孫子市史資料目録三)
- 我孫子市教育委員
- 北海道市資料集 第六集 北海道市史編さん委員会
- 旧布佐町・延命寺資料目録(我孫子市史資料目録四) 我孫子市教育委員
- 金岡村役場文書目録 沼津市立駿河図書館
- 章日町市における文化財の調査 (十日町市文化財調査報告五、立教大学博物館学研究室調査報告十四)
- 図書目録 追録 矯正図書館
- 仲島遺跡 (大野城市文化財調査報告第三集) 大野城市教育委員会
- 白山麓島村諸家文書目録 石川県立図書館
- 『亀の尾の記』索引 石川県立図書館
- 藩主及び一属院法号索引(『加賀藩史料編外備考』) 石川県立図書館
- 平島家文書目録 石川県立図書館
- 新宿区文化財総合調査報告書(一)・(四) 新宿区教育委員会
- 柳嶋客属公会四十週年記念刊
- ティロット谷 井口邦利・那須久雄
- 岩槻市史料 第十一巻 岩槻市史編さん室
- 我孫子市史研究五 特集 旧布佐町のあゆみ 同市教育委員会
- 狛江市史料集 第十二・十三 同市
- 八潮市史料編 近代一 同市役所